【質疑応答】

（田中）　ありがとうございました。３人の話をお聞きになって、内容に共通性があることに気づかれたかと思います。基本的には、学生が相手である場合にも、教員が相手である場合にも、啓蒙はやらないということです。学生や教員の持っているパワーのようなものを前提にしながら、それをファシリテートしていくという形で改善をやっていく。この点は、今までどおりなのです。しかし、そのファシリテートをやっていきながら、なおかつそのオーガナイズをどうやっていくのか。この点に、多分私たちの課題があるのだろうと思っています。

短時間ですが質疑をかわし、休憩を取ってから、ご意見を聞こうと思っています。今の４人の話について、何か質問などありましたら。

（山本）　全体の活動で、啓蒙ではなくファシリテートとおっしゃっていますが、過去のいろいろな研究アウトプットは、結局だれがどのように生かすべきなのかなとちょっと思いました。それはセンターとしてはどのようにお考えなのですか。過去にいろいろなアウトプット、出版物など。

（田中）　私たちがですか。

（山本）　ええ。あるいは実践活動など。

（田中）　とりあえず、私の主観的な考え方ですが、『大学教育学』のところでも書いたのですけれども、結局あの本は、「呼びかけ」なのです。私たちは、このように呼びかけながら、ファシリテートしていきたいと思っています。

（近田）　今の溝上さんのお話の学生・教員交流会のプロジェクトですか。これは、たとえば学生相談センターのような組織は京大さんにはおありなのですか。

（溝上）　いまは、カウンセリングセンターのなかに昔の学生相談室に相当する部署があります。

（近田）　そうですか。ああいうところはどのようにかかわっていらっしゃるのかなと思って。実は、名古屋大学などでは、むしろその学生相談センターのようなところが割と積極的にやっているのです。その辺は、この大きな機構というか、大きなこの現センター全体で取り組んでいらっしゃるというお話だったと思うのですが、そういう学生相談室でしょうか。

（溝上）　学生相談室などの場合ですと、学業を中心としながらも、学生生活や対人関係などいろいろな悩みの相談が来ます。交流会プロジェクトはあくまで教育改善、発展のためのものですから、学生たちが京都大学をよくするための思いを一つに集まってきます。

ちょっとそのあたりの性質が違うかもしれません。

（近田）　ちょっと違うのですね。

（溝上）　ええ。

（近田）　なるほど。大変面白い。

（溝上）　学習支援センターのようなものとも違いまして、むしろけっこうやる気のある学生たちが集まってくるという感じはあります。その彼らがモデルケースになっていろいろ京都大学で勉強するというのはこういうことなのだと、そういう発信を学生側からしていくよう考えています。私たちがいくら言ってもなかなか学生たちは聞きませんので、実際にやっている学生たちの姿を見せていこうと思います。

あと、もちろん教育改善するうえで、学生たちの視点というもの私たちが参考にするという意味もあります。

（小笠原）　今の問題や、松下先生の授業評価や授業アンケートとも関係しているのですけれども、学生には二面性があって、一つは、意欲的な、ちゃんと名前が同定された学生のビヘイビアと、それからマスとしてのビヘイビアがあるのです。これは、時に全く違うような行動をするわけです。意欲的な学生のほうは、たとえば研究室で接する、あるいは課外活動で接することによって、それなりにケアできたりコントロールできるのですが、マスとしての大衆、マスとしての学生がつかみにくくて、それに対してどういうマクロな政策を取ったらいいかというのは迷うところで、たとえば授業アンケート評価などをやるわけですね。それは匿名性を保証して、どうぞかってに書いてくれというところでやっているので、出てくる結果というのは、匿名性ですから、ある極端なものも出てくるのですが、統計的に調べると妥当な線が出てくるというふうにして使えるわけです。

先ほどの松下先生が見せてくれた例では、名前が入ってしまっていますね。あれは有効かどうかという点について、ちょっと疑問が持たれるのですが、名前が入ることによって、従来の授業評価の傾向にどういう傾向が加わると想像しておられますか。

（松下）　その点は多分、多くの大学が記名式にしない理由になっていると思うのですが、今回の授業アンケートでは、四角の囲みの中で、匿名性を確保することを説明しています。もちろん学生自身は名前を書きますけれども、これが教員に伝わるときにはすべて匿名として扱われる。具体的には、回収するときには全部袋に入れて、最後の学生が封をし、教員はその封をしたものを事務室に持っていき、そしてそれを私たちが回収して、全部分析をして、たとえば自由記述や、このキーワードの部分もすべてデータを打ち込んだあとに、名前も全部取り去ったものを教員には返すというふうにしています。

もちろん、それでも学生からすると、何らかの形で名前が分かってしまうのではないかという危惧を抱く学生もゼロではないと思いますが、その点に関しては、教員のほうにも、それから学生のほうにも、かなり周知するようには心掛けています。

（小笠原）　もう一つ、これを見ますと、裏返して②のところは従来の授業アンケート、授業評価といったところで、③のところが一種の達成度のようなものを自己評価しているわけですね。その③のところがどのくらい使えるかという問題があります。それは、結局達成度なのだから、第三者的にチェックするのがいちばん直接的で、正確なデータが出るのではないか。これは自己評価ですから、もし自分で評価するとしたら、その自己評価に対して何らかの第三者的な評価が加わったうえでないと、データとして使えないのではないかというような印象があるのですが、いかがですか。

（松下）　はい。授業についての評価というものは、私たちは達成度というふうにあまり考えていません。いわゆる満足度だとか、あまり「満足度」という言葉を使いたくないので「有意味度」と言ってもいいかもしれませんが、あくまで本人たちがこの授業をどのように受け止めたかということに限定されていると思っています。

でも、授業を評価していくときには、単に学生がその授業をどう受け止めたかということだけではなく、実際にその授業の中でどのように学んでいったかということを見ることも必要なわけです。ですので、そのことをやるために成績データとマージをしたり、あるいはキーワードについては、どのくらい学生がちゃんと書けているか、教員側にもそのキーワードを出していただいて、その一致度を見たり、あるいはこのキーワード自体を全部教員に返して、教員の側でこのキーワードについての評価をしていただくというようなことをやる予定です。

ですから、第三者的な評価というところで言いますと、成績データとのマージということで今のところは考えています。

（小笠原）　もう一つ松下先生にお伺いしたいのですが、工学部との連携のプロジェクトがあって、私は工学部にいたことがあるからよく分かるのですが、創成科目を卒論でやるというのは、実は伝統的な日本の工学部の、工学部に限らず理系のやり方ですね。それで逆に言えば、それしか今まで念頭になかったわけで、いかに卒論で学生をひねるかということに一生懸命になっていたわけです。

それだけでは不十分だということで、初年時からの創成教育などが出てくると思うのですが、工学部のそういう主張に対しては、何らかの議論はないのですか。今のようなことについて。

（松下）　すでに工学部でこれまでやられてきたFD活動として、ディベート型シンポジウムというものがあります。それは事前に学生にアンケートを採って、そのアンケート結果に基づいて、教員と学生が直接教育に関してディベートを行うというシンポジウムなのですが、そのシンポジウムに私が参加したときにも、そういう学生の声がありました。そのときは情報学科のシンポジウムだったのですけれども、コンピューターが使えると思って入ってきたのに、やらされるのは数学であったり物理であったりで、何のためにこういうものをやらされるのかがよく分からないというような声がありました。

創成科目がなぜ低学年から取り入れられるかといえば、学習の見通しや動機づけなど、

そういう面がやはりかなりあると思うのですが、工学部のこの考え方ですと、卒業研究で創成教育ができるといっても、卒業研究というのは４年生ですから、専門に向けての学習の見通しを作るとか、その動機づけを形成していくなど、そのような低学年時での創成科目が持っているような機能は果たしえないわけですね。ですから、その部分は別の形で補わなければいけないと考えています。

それは工学部のほうでも自覚されていまして、具体的には、たとえば「電気電子工学概論」というものは、今年度公開授業の対象にさせていただいたのですけれども、「概論」という名前はついているのですが、そこで行われているのは、まさにこの吉田キャンパスと桂キャンパスの分離というものを逆手に取ったやり方で、１年生に桂キャンパスに出向かせて、各研究室でどんなことが行われているのかということを取材してこさせ、それをパワーポイントにまとめて報告する、発表させるというやり方でした。

これは、アーリー・エクスポージャーと導入教育とをちょうど兼ねたような機能を持っている科目だと思うのです。つまり、将来自分がどのように研究していくのかとか、また、たとえば基礎科目としての数学や物理などがこのようにこの研究には役立っているのだとか、そういう話を先輩からいろいろ聞いてくることによって、今自分たちが低学年で学んでいることが、将来の自分の研究や進路にどのようにしてつながっていくのだろうかという見通しを持てる、そのような授業になっていました。

なので、今回は卒業研究ということだけを書いたのですが、低学年の段階での創成科目が持っているような機能を代替する、そのようなことは、それとは別の授業科目の中で、具体化はされているかなと思っています。

ただ、それが本当にそれでうまくいくのかどうかということは、検証する必要があると思いまして、今このような調査を進めているわけです。

（田中）　あと、どうですか。なければ休憩してお話を聞こうかなと思いますが、よろしいですか。それでは 30 分から始めたいと思います。年齢順にお願い致します。20 ～ 30 分お話を頂いたら、もうそれでほぼ目いっぱいの時間になると思います。

― 休憩 ―

（田中）　そろそろ始めたいと思います。ごらんになっているように、今日は、速記とテープを取っています。これを印刷にします。いずれ、テープを起こしたものを、添付でお送りします。手を入れていただければ幸いです。これからしゃべっていただくことについては、私たちが十分にリアクションする時間はありません。私たち一人一人の受け止め方を、メールでそれぞれに書いてお送りすることになるかと思います。これについても、ご返答いただければありがたいです。以上のようなやりとりのすべてを印刷したいと考えています。今日はただお聞きするだけになるかもしれませんけれども、決してそれだけに終わらせないようにしたいと思っています。何分よろしくお願いします。

予定した時間よりすこし早いのですが、始めます。それでは 20 ～ 30 分話していただければありがたいです。近田さんからよろしくお願いします。